

社会科学における定性／定量の区分についての覚え書き

佐藤郁哉

数字で表現できなければ、それについての知識は貧しく不十分なものだ

——ケルビン卿

数字で表現できるとしたら……それについての知識はまだ貧しく不十分なものだ

——ヤコブ＝ヴァイナー

数字で表現できないものであっても、どうかして数字にしまえ!

——フランク＝ナイト

定性ブーム

社会科学における定性的なアプローチが、ちょっとしたブームになっている。

欧米ではすでに10数年前から、定性的調査 qualitative research ないし、定性的方法(論) qualitative methodology という言葉を含むタイトルの本が続々と出版されるようになっており、また、エスノグラフィーないしフィールドワークという言葉も同じくらい頻りに新刊のタイトルの一部として使われている。中にはセイジ社のように定性的調査の方法論に関する著作を数多く含む方法論のモノグラフをシリーズ化して刊行している出版社さえある。そのような本の中には、純粋な専門書だけでなく概説書や入門書が数多く含まれているが、これは、定性的アプローチが高等教育のカリキュラムの中で確かな位置を占めはじめていることを示しているものと思われる。じっさい、米国の大学に限っていえば、最近の学部生向け講義概要には統計的調

査法と並んで民族誌や事例研究法ないし定性的調査法というタイトルの科目が頻繁に見られるようになってきた。さらに、社会学系の大学院カリキュラムを検討してみると、「理論と方法」という学位取得要件の二本柱のうち方法に関する授業科目について、定量的方法や技法だけではなく定性的方法論を必修ないし選択必修科目の1つとしてあげるところが増加していることがわかる。

このような動向を反映してか、日本でも、近年ようやく定性的方法論に関する書籍の出版や定性的アプローチを主体とした研究成果の刊行が目立つようになってきた。すなわち、生活史法や口述史についてとりあつかった海外の書籍が翻訳されるだけでなく、日本人研究者自身の手になる事例研究やフィールドワークあるいは生活史などに関連する研究成果が、方法論的な自覚をもって発表されるようになってきたのである。さらに、各種学会の研究大会においても、定性的調査に関連するシンポジウムや講演が行われるようになってきた。

実に奇妙な事ではあるが、これだけ定性的アプローチに関する議論が盛んになっている割には、「では、定性的な研究法とはいったいどのようなものを指すのか」というきわめて基本的な疑問に対する解答を求めても、十分に納得のいく答えが得られないことが多い。ともすれば、定性と定量の区分といういわば総論的な部分に関しては全く議論を省略してしまうか、ごく簡単な解説ですませ、一般に定性的な技法として分類されているテクニックの詳細や実践例を紹介する記述に終始しがちである。つまり、各論は盛んであっても総論が欠けているのである。

これは一つには、定性/定量という区分がきわめて多岐にわたっていることによる。これから詳しく見ていくように、実は、定性/定量という区別は、データそのものの性格だけでなく、集めたデータを分析する手法や手続き、研究の成果をまとめた報告書の文体、さらには研究の大前提となる認識論的前提にも関わるものなのである。これらさまざまな次元における区分は、相互に重なり合いかなりの程度一致する部分があれば、必ずしもそうでないケ

ースも多い。したがって、どれか1つか2つの次元のみに焦点をあてて定性的研究法——および、その対概念としての定量的研究法——について定義しようとしても、矛盾や食い違いが生じてしまいかねないのである。

定性的研究法についての議論を深め、また定性的なアプローチと定量的なアプローチの間のより生産的な関係のあり方を探っていくためには、これらの多岐にわたる区分を明らかにしていかなければならないだろう。本論の目的は、じゅうらい定性／定量の区別に関連してなされてきたさまざまなレベルの議論について一つひとつ検討していきながら、定性的および定量的な研究法について包括的に把握していく上で必要となる大まかな見取り図を描いていくことにある。

定性／定量の区分の諸相

次ページにあげた表が上で述べた見取り図を描く際の出発点となるデッサンである。この表に示したように、定性／定量の区別については、少なくとも、以下の5つのポイントから論ずる事ができる。

- ①学問分野
- ②技法
- ③データのタイプ
- ④報告書の文体の特徴
- ⑤認識論的前提

これまで述べてきたことから明らかなように、定性・定量に関する従来の議論は、これら5つのレベルのうち主に②と③のレベルを中心にして展開されてきたといえる。言うまでもなく、社会調査の全プロセスに注目する時には、①から⑤までのすべてのレベルを押さえておく必要がある。

「定性 対 定量」の区分の諸相

		定 性	定 量
学 問 分 野	全 体	人類学 歴史学 (人文科学) (社会科学)	社会学 経済学 心理学 (自然科学)
	下 位 分 野	民族誌学 生態学的心理学 認識人類学 象徴的相互作用論	サーベイ社会学 実験社会心理学
技 法		事例研究法	統計的研究法
		フィールド観察 参与観察 偶発的観察 資料の解釈と分析 非構造的面接・深層面接	実験室実験 組織的実験 統計資料分析 内容分析 構造的面接
デ - タ	資 料	歴史資料 自伝, 手記, 日記 文学作品 フィールドノーツ	センサス・データ サーベイ・データ 実験データ 観察データ ("hard data")
	尺 度	質的データ① →exact patternment	量的データ① →exact measurement
		名義尺度 順位尺度 (カテゴリーカル・データ) 質的データ②	間隔尺度 比例尺度 量的データ②
研究報告書の 文章の特徴	文 体	小説・歴史記述 紀行文, ノンフィクション レトリック多	科学論文 レトリック(一見)少
	語 彙	日常語彙 日常(自然)言語	数値・数式・特殊記号 専門用語 人工言語
	目 標	問題設定と構成要素の同定 =相応しい名前を与える	構成要素の測定 =相応しい数値を与える
認識論的背景		個性記述	法則定立

学問分野

定性／定量の区分をめぐる議論は、まず第一に、社会科学の研究方法において自然科学の方法論モデル（のある特定の側面）に対して学問分野全体としてどのようなスタンスをとるかという問題であった。すなわち、定性／定量の区分は、まず第一に「定性的学問 対 定量的学問」という次元の区分に関わる問題なのである。

この点に関して、それぞれの学問分野を総体として見た場合には、社会諸科学においてきわめて対照的な対応が見られた。自然科学モデルの顕著な特徴を示しその「成功」のカギであると思われた定量的なアプローチを採用することこそが、その学問自体の「科学」としての存立可能性や正統性を確立していく上で必須の条件であるという認識が大勢を支配した分野と必ずしもそうでない分野とがあるのである。（また、ダイレクトに自然科学モデルを採用・模倣するのではなく、既に定量的アプローチを採用して「成功」をおさめた他の社会科学などから迂回的にアイデアや技法を借りてくる場合もあった。たとえば社会学が社会現象の測定について心理学やマーケティング・リサーチのアイデアを借りてきた例などがある）

経済学や心理学（ここでは便宜上心理学を社会科学に含めている）あるいは社会学は、総体としてみた場合、かなり早くから自然科学の方法論モデルを採用し、定量的なアプローチに傾斜していった学問分野であると言える。社会現象や心理現象を数値化し、数理・統計モデルによって解析する方法論は、これらの学問が科学としての社会的認知と正統性を獲得し、地歩を固め、また後継者を確保・養成していく上できわめて有効な方向であった。米国において1950年代に案出されたという行動科学 behavioral science なる呼称は、まさにこの社会科学の自然科学化への傾斜を象徴するものであったと言える。

これに対して、歴史学や文化人類学および社会人類学の場合は、かなり状況が異なっていた。何度か定量的な方法の導入が試みられ、また定量的な技

法が補助的な手段として用いられることによってある程度の成果をあげることもあったが、研究の中核には常に歴史事象の丹念な記述とそれについての解釈あるいはまた特定の社会や部族についての詳細な記述があった。人類学の方法論に関していえば、社会学者によって「人類学的方法 anthropological method」という呼称が、しばしばフィールドワークの代名詞として使われることがあるように、社会学の経験的調査において主流の位置を占めていたサーベイや既存資料の定量的分析などはきわめて対照的な方法としてとらえられていた。

もっとも、以上の議論は、各学問分野の総体としての動向を極端に単純化したものであることは言うまでもない。つまり、それぞれの学問分野の中でも比較的制度化が進んだ部分をことさらに拡大して論じたのである。実際には、それぞれの学問分野内部にはきわめて異なった傾向が含まれており、下位領域においては、同じ学問分野の名称で呼ぶのがためらわれるほど似ても似つかぬ傾向がみられることも稀ではない。

たとえば、社会学の場合には、世論調査や態度調査は、しばしば数多くの対象に対して共通に適用可能な一種のモノサシを構成する事によって、社会現象を数値化・「変数」化し法則を確立しようとする目的でもって行なわれた。これに対して、象徴的相互作用論者に代表される定性的なアプローチをとる社会学者たちは、参与観察やインテンシブなインタビューを通して、特定の地域やグループ、あるいはサブカルチャーや個人の事例を詳細に記述・分析していくことに力点を置いている。また、シカゴ学派とよばれる社会学者たちの中には、フィールドワークを通してさまざまな地域社会の現象をすぐれた都市民族誌としてまとめていった者も多い。

心理学においても、臨床心理学と実験心理学は、しばしばきわめて対照的な関係にある。臨床心理学が症例の理解とそれにもとづく治療を目的とすることが多いのに対して、実験心理学の場合は「法則」や「効果」の発見とその検証に重点がおかれる。

技法

それぞれの学問分野のサブフィールド毎の違いをさらに詳しくみていくと、これが技法レベルでの定性／定量の区分に密接に結びついている事がわかる。これが、「定性的技法 対 定量的技法」という次元の区分である。これは、かなり大まかな区分としては、「事例研究法 対 統計的研究法」という区分に対応する。それぞれの研究法に分類される個々の技法としては、事例研究法には歴史資料の分析、現場（臨床現場、人類学的フィールド等）での観察、インテンシブ・インタビューが含まれ、一方の統計的研究法として典型的な技法としては、質問紙や質問票を用いたサーベイ、実験室実験、チェックリストを用いた組織的観察、既存の統計資料の二次分析などがあげられる。

もっとも、研究を進める上での具体的な作業の内容に注目してみると、この区分は必ずしもそれほど明快なものでもなければ絶対的なものでもないことが分かる。たとえば、事例の研究に際して統計的技法が用いられることは稀ではないし、逆に統計的研究の前段階の作業として定性分析が行われることも稀ではない。

定性的な分析作業の本質を、分析の対象を構成している要素を確定し、それらの要素間の関連構造を見極めること、すなわち「対象にふさわしい名前を与えること」(Brewer & Hunter *Multimethod Research* p. 17) と解するならば、定性的な作業は、ほとんどあらゆる研究に含まれていると言えよう(問題発見や仮説生成の過程を省略して、解くべき問題や検証すべき仮説が「天下り式」に与えられることも稀ではないが)。この場合、定量的な分析の作業は、定性的な作業を通じてある程度明確になった要素のうち数値化可能なもの、あるいは数値化することが意味のあるものについて数量的に記述する、すなわち「対象にふさわしい数を与える」作業となる。

観察法を例にとって、この定性的作業と定量的作業の関連についてももう少し詳しくみてみよう。定性的な技法として典型的なのは、フィールドワークにおける参与観察や、日記法を用いた乳幼児の発達プロセスについての観察

などである。そのような研究の場合、仮説検証というよりは、むしろ仮説生成ないし仮説発見あるいは問題発見の手法として、偶発的な観察 incidental observation が重視される。これに対して、定量的アプローチの場合には、チェック・リストや測定法を用いた組織的観察および実験的観察が典型的である。言うまでもなく、これらの2種の観察プロセスは、ほんらい相互に対立するものではない。それどころか、偶発的な観察を元にして観察すべき対象やその次元を確定した上で尺度やチェックリストを構成して組織的観察を行い、個別の仮説を検証し、あるいは、定量的な解析の結果をもとにして新たな問題を発見していくというような研究法がとられた時にこそ、もっとも実り豊かな研究が可能になると言える。いずれにせよ、定量的な観察技法による分析作業は、その前段階として、「そもそも何をどう見るべきなのか」という問題を確定するために定性的な観察が不可欠なのである。言うまでもなく、同じようなことは、サーベイなどについても言える。

もっとも、定性的な作業がほとんどあらゆる定量的作業の前段階として存在するとは言っても、「何が問題である(べき)か」という設問それ自体を発見しあるいは確定する作業は(時には全く新しい研究分野を開拓する作業もふくまれる)、これまで技法として体系化ないし手続き化することが可能な作業としては認識されず、むしろ定式化が困難ないし不可能な一種の「名人芸」とされてきた。あるいはまた、実証の作業というよりは理論構成に関わる作業の一部とされることも少なくなかった。これに対して、定量的な作業には比較的容易にセットメニュー化しパッケージ化する事が可能であり、まさに技法=テクニックと呼ぶに値するものも少なくない。また、技法レベルで定性的方法について議論する場合があったとしても、研究プロセス全体の中に定性的な作業を位置づけるような議論は少なく、むしろある程度問題が確定した後で、現場観察や資料の読みとりという具体的な作業レベルのテクニックのみを問題とすることの方が圧倒的に多かった。

以上のような技法次元における定性/定量の二重の区分についての認識不足は、一方では、社会科学の一部で、問題そのものを掘り下げる段階での詰

めを怠って定量的な分析にかける性急な「通常科学」化をもたらし、加えて解くべき問題とは独立に解法テクニックだけが精緻なものになっていくという傾向に直結していった。また他方では、定性的な研究を得意としてきた研究者たちの間にありがちな、自らの研究の手順をことさらに秘教ないし秘伝化し、それ自体を冷静に見直す作業を怠る傾向にもつながってきた。そして、両陣営のこのような意味での「怠慢」は、定性的アプローチと定量的アプローチの間の無用の対立を生み出すのみならず、問題を詰める質的な作業は理論家（「理論屋」）に、それを操作化して実証する作業は「調査屋」に任せきり、という悪しき分業をもたらす事にもつながったのである。

いわゆる「中範囲の理論」や「データ密着型理論アプローチ grounded theory」とよばれるアプローチは、この、データ収集のみならずデータ分析の過程を含み、さらに理論構築を行う上での定性的アプローチを何とか体系化し手続き化することを通して一種の方法として鍛え上げようとした試みとして見ることもできる。

データ

学問分野や技法における定性／定量の区分がかなり輻輳する要素を含んでいるのに対し、データ・レベルの定性／定量の区分は、一見極めて明快であるように見える。収集するデータそのものに定性的あるいは定量的な性質が内在しているように見えるからである。通常、質的データという場合には、たとえば自伝や手記の類いがあるの典型であり、また文学作品も貴重な質的資料とされる。各種の歴史資料が質的データに分類できることは言うまでもない。そして、定性的技法の典型の1つであるフィールドワークの根幹となるデータは、日々の観察記録をまとめあげたフィールドノーツである（フィールド「ノート」ではない。これについては、佐藤郁哉『フィールドワーク』参照）。

これら質的データの顕著な特徴の一つは、それが容易に数値化できないところにあり、研究者の分析の焦点は、詳細な分析によってそれらデータの中

から意味の構造を読みとり、要因間の関係性を判定するところにある。

これに対して、量的データとして典型的なのは、サーベイをもとにして収集され数値化されたデータであり、また、各種の既存センサス・データである。知能テストをはじめとする各種心理テストのデータおよび実験室実験から得られる測定データなども典型的な量的データである。また、チェックリスト方式によって収集できる観察データの多くも、頻度や程度などの形で数値化されることによって、定量的な分析の原材料となる。このような量的データを用いる研究者の最大の課題は、いかに夾雑物を排して正確なデータを収集するかであり、そしてまたそのデータの構造を判定していく上で最良の解析方法を模索していくことである。

言語学者のサピアの言葉をかりて言えば、定性的データの処理にあたっては、パターンの厳密な割り出し exact patternment が最大の課題になるのに対して、定量的データの収集と処理にあたっては、厳密な測定 exact measurement が重要な課題となるのである (Sapir "Linguistics as an Exact Science")。

こうしてみると、データレベルでの定性/定量は区分はきわめて明快に見える。しかしながら、この区分は必ずしも収集する経験的な資料自体に内在している区分というよりは、それをある一定の視点にたってデータとして処理するときにはじめて生じる区分であることも多い。たとえば、文芸作品や報道記事の「内容分析 content analysis」のような作業においては、それらの資料を意味の構造の読みとりという質的な分析にゆだねることも出来れば、特定の単語の出現度数やセンテンスの長さ注目してそれらを数値に変換することも可能である。前者が通常の意味での質的な分析作業であり質的データであるが、後者の取り扱いの数値への変換であり、定量的な分析作業を経て量的なデータに変換される。

これが、データ次元での定性/定量の区分のもう一つの側面、すなわち、統計処理にあたって構成されるデータの尺度としての性格における区分に対応する。すなわち、性別や出身地のようにほんらい連続値として処理できな

いデータに対して分類作業を通じて名義的な数値を割り当ててコード化する場合や（名義尺度）、色度や光沢度のように相対的な順位のみを問題にする場合（順位尺度）、この2つの変換プロセスを経て数値化されたデータを質的データあるいはカテゴリカル・データと呼ぶことがある。これに対して、温度などのように数値の差が意味をもつような尺度（間隔尺度）および、長さや重さのように差だけでなく比が意味をもつ尺度（比例尺度）を量的データとよぶ事があるのである。

報告書の文章の特徴

以上述べてきた、定性的アプローチと定量的アプローチをそれぞれ特徴づける技法とデータの特徴は、かなり直接的に研究成果の報告書の文章の特徴に反映される。定性、定量それぞれの典型的な業績とされるものを一見して区別できるのは、その文体であり、語彙である。つまり、それぞれの報告書は、「何について語るか what」だけでなく、「どう語るか how」についても大きく異なるのであり（加えて、「何故それについてそのように語るのか why」）、全く違ったジャンルの文章のようにも見える。便宜上ここでは、これを「定性的報告書 対 定量的報告書」という区分として扱うことにする。

定量的な報告書の特徴として最も目につくのは、そのなじみにくさと「とっつきにくさ」である。細かい数値がびっしりと書き込まれた表、鋭角な直線や曲線の幾何学的パターンからなるグラフ、特殊な数式や記号は、それだけで一般人だけでなく他の学問を専攻している者の理解をも拒絶しているようにも見える。これらは比較的目的につきやすい特徴であるが、もう少し詳しく検討してみると、定量的な発想による論文には、もっと微妙なところにも特徴があることがわかる。すなわち、使われている言葉自体が日常ごく一般に目にする文章では滅多に出会うことがないものが多いのである。いわゆる学術用語/「ジャーゴン」である。また用語を構成する個々の単語は日常目にするものであるが、それが非日常的な仕方と組み合わせられていることも稀

ではない。このような言葉が散りばめられた報告書は、読み味わうべき文章というよりは、解読すべき暗号文のようにも見えてくる。

そして、このような一種の人工語をふんだんに盛り込んだ報告書全体の構成が〈問題・方法・結果・考察〉という形式をとる時、定量的な報告書は、厳密な「科学論文」の体裁をまとう事になる (Turner & Turner *The Impossible Science* p. 115)。じっさい、定量的なアプローチにもとづく報告書の形式のモデルは、明らかに自然科学系の論文にある。そして、自然科学系の論文と同様、定量的報告書の多くは、とっつきにくく無味乾燥で素人や門外漢には全く理解できそうもないが、その半面、何やら確実に正確な事を言っているように見える。

これに対して、定性的な研究法にもとづく報告書の中には、素人にもきわめて分かりやすく、中にはエッセイや物語のようにして読めるものが少なくない。中には、学術論文や学術報告書と呼ぶにはためらわれるものも数多く含まれている。特に人類学者の書く民族誌は、しばしば紀行文や小説に酷似している。同様に、社会学者の手になる都市民族誌は小説家やジャーナリストの書く「ノンフィクション」と呼ばれるジャンルの文章によく似ている。また、歴史学者の書く歴史事象の記述、臨床心理学者の書く事例報告は、一種の人間ドラマとして読めないこともない。そのような文章の場合、使われている言葉の多くは自然言語、すなわち日常ごく一般に目にふれる事の多い言葉であることは言うまでもない。

もちろん、定性的な報告書のかなりの部分は、定量的報告書と同じように専門用語のオンパレードである。明らかな悪文も少なくない。しかし、それでも、定量的報告書にくらべれば語彙や文体についての許容度が高いために、何とか読み通せるものが結構ある。さらに定性的な報告書の場合は、文体や語彙だけでなく構成に関しても許容度が高い。〈問題・方法・結果・考察〉という筋立てを基本的に踏まえながらも、それを違った形で表現することもできれば、全く無視することだって出来ない訳ではない。

また、これは日本の場合の特殊事情であるが、定量的な論文のほとんどが

横書きで書かれるのに対して、定性的な報告書が縦書きを採用する事が多いのも、定性的報告書の読みやすさにつながっていると言える。(もっとも、自然科学者や定量的な社会科学者も啓蒙書や一般書の場合には、よく縦書きで文章を書くし、定性的な学問分野でも学会誌だけは横書きのケースも多い。また、社会一般の横書きの普及により事情は大きく変わりつつある——いまや小説や俳句さえ横書きで書かれることがある！)

そして、定性的な研究法にもとづく報告書のもう一つの大きな特徴は、それがしばしば明らかにそれと分かるレトリックを駆使しているところにある。定性的な報告書の著者は、自らの主張を浮き彫りにし読者を説き伏せるために、しばしば大げさな表現を使うのである。直喩、隠喩、換喩、提喩を駆使する。論敵を罵倒する。自らの説が世に受け入れられない事を悲憤慷慨してみせる。時には、対象に対する愛情や嫌悪の念を文章の上であからさまに示すことさえある。

言葉を飾り文章を修飾し、論理(だけ)ではなく情緒に訴えて読者を説得するための修辞に満ちた定性的な報告書は、読みやすく面白いけれども何やらいかかわしくも見える。言葉の詐術に満ち、学術論文がほんらい伝えるべき「真理」や「事実」「真実」は、日常語のもつ多義性やあいまいさによって覆いかくされ、修辞によって曇らされているように見える。

定量的論文の文章は、これとは全く正反対のように見える。数値や数式、見慣れない記号を含む文章は、とっつきにくく、なじみにくく、読みにくいかもしれないが、的確な言葉と文章で真理を正確に伝えているように見える。レトリックを排して真実を余すところなく映し出す曇り無き鏡のように見えるのである。しかし、科学の文体論やレトリック論に関わる研究が明らかにしているように(紙幅の制約からここでは詳述を控える。たとえば、Hunter ed. *The Rhetoric of Social Research* 参照)、実際には必ずしもそうではない。語彙、スタイル、構成、そして研究活動そのものや研究報告自体が置かれている社会的文脈を詳しく吟味してみると、事実をありのままに伝えているように見える自然科学の論文や定量的な報告書も、結局はある特定

の視点からある特定の利害関心にもとづいて現実を切り取って解釈したものであることが分かるのである。

すなわち、次のようなことを暗黙の前提とする科学論文は、それ自体がその特定の視点と利害関心とを巧妙に隠蔽する上できわめて効果的であるという意味において、実は一種のレトリックとなっているのである——「数値や厳密に定義された学術用語を用いる事によって日常語に含まれる多義性や曖昧さを極力排し、また、レトリック、すなわち論点を言葉の遊びによってすり替え、論理ではなく感情に訴えがちな技巧を極力排すことによって事実を冷静かつ客観的に伝える」。

言うまでもなく、以上に述べてきた報告書のスタイルの次元での定性/定量の区分は、定性的報告書については書物、定量的報告書については雑誌論文という、それぞれのスタイルの特徴を典型的に示す発表媒体の特徴をかなり誇張して対比させたものである。実際には、自然科学者や定量的なアプローチをとる社会学者も一般書や啓蒙書を書く場合には、しばしば数値や数式、記号(という一種の速記法)による表現をなるべく避けて平易な表現を心がける。また、定性的技法と定量的技法を組み合わせる対象に多方面からアプローチした「マルチメソッド」(これについては、佐藤郁哉『フィールドワーク』参照)を採用した研究の報告書の中には、単純に分類できない一種の「混合話法」を採用しているものも多い(たとえば、Cosser, Kasushi, Powell *Books*)。

認識論的前提

以上、技法、データ、報告書のスタイルの3点にわたって論じてきた文脈においては、かなりの程度、定性と定量の区分を相補的なものとして位置づけてきた。これに対して、最後のポイント、すなわち学問的探求の本来の目標をどこにおく(べき)かという点に関しては、定量と定性はしばしば相互に対立するアプローチとしてとらえられる。すなわち、定性的な研究と定量的な研究の区分を「個性記述 *idiographic* 対 法則定立 *nomothetic*」の

区分ないし対立とパラレルなものとしてとらえる場合である。

個性記述的なアプローチは、単一の事例や個々の事件をインテンシブに吟味し、事例や事件の唯一性・一回性を強調する。用いられる方法は、個々の事例や事件の丹念な記述であり、その全体性においてはじめてとらえる事ができる内的な構造や意味の読みとりが目的となる。これに対して、法則定立的なアプローチは多数の事例や出来事を現前させている一般法則を見いだそうとする。この場合、個々の事例は、多数の事例に適用できるモノサシとしての「変数」の組み合わせとして把握可能であるとされる。

研究自体の目的に関しては、しばしば、定性的な個性記述的アプローチは、解釈や了解、理解を目指すのに対して、定量的な法則定立的アプローチでは、分析や測定、そして「予測とコントロール」が目標となるともされてきた。

そして、この区分が学問的探求の本来のあるべき姿は何か、という点に関する見解の相違として現れるとき、対立は決定的なものとなる。すなわち、個性記述的アプローチを唯一絶対の方法と考える者は、事例や事件の唯一性・一回性を強調し、複数の事例や事件は厳密な意味では相互に比較が不可能なものであると考える。したがって、学問の目的は、単一の事例や事件にのみ適用可能な因果や構造の説明の探求に向けられるべきだとする。

これに対して、法則定立主義者は、数多くの事例から統計的に導き出された法則こそが科学的に有意義なものであり、事例研究はせいぜい探索的な意味しかもたないとする。たとえば、ランドバーグは、事例ドキュメントを「統計学という尻にくっついている無力なしっぽ」と呼び、事例研究法はそれ自体は科学的な方法ではなく、科学的な方法の第一ステップに過ぎないとする。彼によれば、数多くの事例を分類し要約する統計的方法こそが唯一絶対のものではないにしても、最もすぐれたものであるという (Lundberg "Case Work and the Statistical Method")。このような発想にもとづき、ランドバーグは、直観、洞察、理解を粗雑な「おおかれ少なかれ潜在意識的な統計学的一般化」とであると定義し、また、次のように述べている。

こういうわけで、事例研究法と統計的方法との相対的価値についての唯一可能な問題は、それ自体、データの分類とデータにもとづいた一般化を、常識的な観察という、いきあたりばったりで、質的で主観的な方法によってなすべきなのか、それとも統計的な方法という、体系的で量的で客観的な手続きを通して行うべきなのか、という問題に還元されることになる。

言うまでもなく、これと同じような党派的な発言は、個性記述の定性的方法を唱える者たちの側からもなされてきた。そして、そういう場合は、本論の最初にあげた学問上の区分が学際的な協力が難しいほどに越えがたい溝であることを示すものとしてとらえられてきた。たとえば、次のような対立図式である (Smelser *Comparative Sociology* p. 203)。

- ・心理学における「統計的方法 対 臨床的方法」
- ・歴史学 対 社会科学
- ・人類学 対 社会学
- ・比較社会学における「地域研究派 対 比較主義派」

上にあげたランドバーグの発言は70年近くも前のものであるにも関わらず、いまだに定量的アプローチをとる研究者が定性的アプローチに対してしばしばもつ見解と極めて近いものを含んでいる。それは、たとえば、それは定量的論文が大勢をしめる既存の学会誌に投稿された定性的論文が、その審査の段階で受ける扱いあるいはまた近年の定性的アプローチのブームに対する定量的な研究者のとの対応にもあらわれている。

結語

以上みてきたように、定性/定量の区別には実にさまざまな次元のものがある。それぞれの次元における区分は必ずしも相互にオーバーラップしている訳でも、厳密に対応している訳でもない——したがって、さきにあげた表

は決して二項対立的な図式ではないのである。それは、社会科学の創生の頃からの生い立ちと密接に関連しているように思われる。後発の学問が負わなければならない当然の宿命ではあるが、社会科学はその創生の頃から、自然科学モデルと人文系諸学のモデルとのあいだを揺れ動いてきた。この社会科学のアンビバレントな位置づけは、一面では社会科学内部における無用の対立を生み出してきたが、他方では、独特のダイナミズムを作り上げてきたこともまた事実である。自然科学に対しても人文諸学に対してもよそ者であった社会学者たちは、しばしばとんでもない誤解や勘違いから、それぞれの学問分野では有効であった方法を誤用してきたが、時には、2つの極のあいだを行ったりきたりする振り子運動をするマージナルマンの戦略的な視点から、既にある程度確立された学問分野の住人たちには明確に認識し難い問題を、まったく違った角度から提起することも少なくなかったのである。

この20年あまりの社会科学の動向は、この振り子が人文系のモデルの方にことさら大きく振れたものとして特徴づける事ができる。いわゆる「解釈(学)的転回 interpretive turn」が唱えられ、社会現象をそれにたとえるべきアナロジーの対象として、それまでの精妙な機械や有機体といったものとは似ても似つかぬ、ゲームや演劇、あるいは文献テキストという人文系の学問からの移入物が頻繁に使用されるようになってきたのである。

それにともない、社会「科学者」のイメージにも、変化が生じてきた。もちろん、これまでのスター的な社会学者のイメージはいまだに健在である。つまり、世論調査や知能検査、あるいはマーケット・リサーチの結果を明快なグラフや表にまとめ上げる「ナンバー・クランチャー」のイメージ、あるいはまた白衣をまとって実験室(ラボ)にこもる実験社会心理学者のイメージである。最近特に目立つ変化は、これらの旧来の「サイエンティスト」としてのイメージに加えて、翻訳や文芸批評あるいは図像分析をする人文系の学者に限りなく近いイメージが加わったということである。前者が「法則という例証」という説明形態を理想とするならば、後者のイメージを体現する社会学者たちは「事例と解釈」をみずからの第一の課題として引き受ける

ことになる(ギアツ「薄れゆくジャンル」)。

近年の定性的アプローチの隆盛は、この社会科学という知の領域およびそれを体現する社会学者たちについてのイメージの変貌と密接に関連しているように思われる。人文系のモデルへのシフトは、一面ではこれまでの科学モデルからの解放ではあるが、他方では、方法的なアナキズムを生みだしかねない。また、定量的なアプローチによって蓄積されてきたアイデアや知見を放棄してよいという言われがある筈もない。あやまった定性的アプローチの偏重は、容易に「読書感想文」的なあるいは悪い意味での「エッセイ」的な報告書へと結びつくであろう。

社会科学が(いい意味での)実証科学であり続けるためには、社会学者は、法曹関係者と同様、自分が「挙証責任」を負っている事を認識すべきであろう。すなわち、しっかりとした証拠や根拠にもとづいて自らの主張を展開するという責任である。もちろん、その証拠や根拠がどれだけ「しっかり」としたものであるかについては、見解が大きく分かれることはありうる。しかし、見解の相違は、単なる相互の無知や誤解にもとづくものであってはならない。そのためにも、定性/定量の区分に関する検討をはじめとして社会科学における実証研究の方法論に関する議論をより一層本格的なものにしていく必要があるだろう。

(一橋大学助教授)